遠藤（岩野）清子

長谷川時雨

一

それは、華（はな）やかな日がさして、瞞（だま）されたような暖（あった）かい日だった。

遠藤清子の墓石（おはか）の建ったお寺は、谷中（やなか）の五重塔（ごじゅうのとう）を右に見て、左へ曲った通りだと、もう、法要のある時刻にも近いので、急いで家を出た。

と、何やら途中から気流が荒くなって来たように感じた。

「これは、途中で降られそうで——」

と、自動車（くるま）の運転手は、前の硝子（ガラス）から、行く手の空を

覗(のぞ)いて言った。

黒い雲が出ている。もっと丁寧にいうと、朱のなかへ、灰と、黒とを流しこんだような濁りがたなびいている。こちらの晴天とは激しい異(ちが)いの雲行きだ。

赤坂からは、上野公園奥の、谷中墓地までは、だいぶ距離があるので、大雨(たいう)には、神田(かんだ)へかかると出合ってしまった。冬の雨にも、こんな豪宕(ごうとう)なのがあるかと思うばかりのすさまじさだ。

私はすっかり湿っぽく、寒っぽくなってしまって、やがてお寺へ着いたが、そこでは、そんなに降らなかったのか、午前中からの暖かい日ざしに、何処(どこ)もかも明

け放したままになって、火鉢だけが、火がつぎそえられてあった。

その日のお施主側は、以前の青鞜社の同人たちだった。平塚らいてう、荒木郁子という人たちが専ら肝入り役をつとめていた。死後、いつまでも、お墓がなかった遠藤清子のために、お友達たちがそれを為した日の、供養のあつまりだった。

会計報告が、つつましやかに、秘々と示された。ずっと一隅によって、白髪の、羽織袴の角ばった感じの老人と、その他にも一、二の洋服の男がいたので、その人たちへの遠慮で、後のことなどの相談をした。会費

と、後々の影向料とがあつめられたりした。

やがて、本堂へ案内された。打揃って座についたが、本堂は硝子障子が多いので、書院よりは明るいが、その冷はひどかった。読経もすこしも有難みを誘わなかったが、私は、眼の前の畳の粗い目をみつめているうちに、そのあたりの空間へ、白光りの、炎とも、湯気とも、線光とも、なんとも形容の出来ない妙なものが、チラチラとしてきた。

——遠藤清子さんは悦んでいるだろう。

たしかにそうも思いはしたが、それよりも、急に、わたしの胸を衝いてきたものがある。廿五年の歳月は、

こんなにもみんなを老わしたかと——
誰の頭髪にも、みんな白髪の一本や二本——もっとあるであろう。その面上にも、細かき、荒き、皺が見える。
ひとり、ひとりが、焼香に立った。
悪寒が、ぞっと、背筋をはしると、あたしはがくがく寒がった。雨のなかを通りぬけて来た時からの異状が、その時になって現われたのだが、すぐ後にいた岡田八千代さんがびっくりして、
「はやく、火鉢のある方へ行かなければ。」
と案じてくれた。生田花世さんも、外套をもって来ま

しょうかといってくれた。

　みんなも気がついて、向うへ行っていよとすすめる。焼香もすましているので、あたしは親切な友達たちのいう言葉にしたがった。

　外套にくるまって、火鉢に噛（かじ）りついていると、どんなふうかと案じて来てくれながら、そうではないような様子に、

「おお寒い寒い。」

と、自分も逃げて来たように言って、八千代さんはそこらの障子を閉（し）めてくれて傍（そば）へ来た。

「どう？　お寺で風邪（かぜ）なんぞひいたらいけないから。」

あたしは大丈夫と言いながら丸くなって、友達の顔も見なかった。見たら、涙が出そうでしかたがない。

　みんな、たいした苦労だ——

と、そればかりを嚙（か）むように思った。みんな、跣足（はだし）で火を踏んだような人たちだ。今日（こんにち）の若人（わこうど）たちの眼から見たらば、灰か、炭のように、黒っぽけて見えもするであろうが、みんな火のように燃えていて、みな、それぞれ、その一人々々が、苦闘して、今日の、若き女人（ひと）たちが達しるというより、その出発点とするところまでの茨（いばら）の道を切り開き、築きあげて来たのだ。いたずらに増（ふ）えた髪の霜（しも）でもなく、欠伸（あくび）をしてつくった

小皺（こじわ）でもない。

――その間に、こんなにも、こんなにも、女人（おんな）の出る道は進展した――

前の夜（よ）、あまり生々（いきいき）したグループのなかで、何時（いつ）までもいつまでも話しこんでいたあたしは、あんまり異（ちが）った仲間のなかにいて、たしかに戸まどいもしているのだった。年月などというものを、さほどに意識しない日頃であって、何時（いつ）も若い友達と一緒になっていられる幸福のために、かえって、死（しに）もの狂いであった誰彼（たれかれ）なしの過去に、ひたと、面（おもて）をこすりつけられたような思いだった。

表面（おもて）に、潑剌（はつらつ）と見えるからといって、青春者（わかいひとたち）が、やはり世の中へたつのは、多少とも死もの狂いであるのと同様、先覚者（さきのひとたち）も決して休止状態でいるのではない。おなじ時代を歩んでいるのではあるが、まあ、なんと、今日（いま）から見れば、そんな些事（こと）を——といわれるほどの、何もかもの試練にさらされて来た人たちだろう——

私は、神近市子（かみちかいちこ）さんの横顔を眺め、舞踊家林きん子になった、日向（ひなた）さんに、この人だけは面影（おもかげ）のかわらない美しい丸髷（まるまげ）を見た。

「清（きよ）も、よろこんでおりましょう。」

と、もとの座についた、白髪の老人は、重い口調で

挨拶(あいさつ)をしていられる。
それをきくと、周囲の人がわやわやとして、
「長い間、お心が解けなかったそうですが、いま、お兄さんがそう仰しゃったので、これで、仏さまとの仲も、解けて——」
と、いうような意味の言葉を、一言(ひとこと)ずつ、綴(つづ)るように言った。とはいえ、解けあわぬ兄妹(きょうだい)でも、遺骨は墓地に納めさせてくれてあったのを、その人々も知っている。墓を建てたのを、差出たことをしたと思われないようにとも、友達たちは老人をいたわるようにいった。
「どういたしまして、よく、あれの心を知ってやって

くださる、あなた方(がた)に、こうして頂いた事は、よい友達をもった、彼女(あれ)の名誉で――」

と、兄という人は思慮深くいうのだった。

「あなた方は、彼女(あれ)のことばかりお聞きなさってでしょうが――」

と、老人は、感慨を籠(こ)めて、わたくしも困りましたと言っていた。

　そんな事も、よく聞きたいが、老人とわたくしの座とは、かなり間がへだたっている。それに、洋服の男子(ひと)が、その老人の方へむかって坐って、何か話しかけているので、老人のいうことは、半分もきこえてこなかっ

た。

「彼女（あれ）も、さぞ、わからない兄だと思ったでございましょうが、わたくしも困りました。わたくしの眼の悪くなったのも——」

と、黄白（きじろ）い四角い顔の、腫（は）れあがったような眼瞼（まぶた）に掌（てのひら）をかぶせて、

「ただいまで申す、殴（なぐ）りこみのようなことを、彼女（あれ）がいたしましたので——」

新旧思想の衝突——さまざまな家族苦難の一節の、そんなことを話すように、口がほぐれて来たのは、記念の写真をとったり、お墓へ参ったりしたあと、谷中（やなか）

名物の芋阪（いもざか）の羽二重団子（はぶたえだんご）などを食べだしてからだった。
「それはどんな訳で？」
と、きいたものがある。
「荷物でしたかなんだか、なんでもわたせと、男どもを連れて押かけてくるというので、それならばと、こちらでも、用心して人もいたのですが――戸障子をたたき破（こわ）すような騒ぎで、その時、乱暴人（あばれもの）に眼を打たれました。」
視力も失（なく）したとでもいったのか、まあね、という嘆息もまじってきこえた。
「あ、あすこの――あの時の方ですか？」

後向きの男の人の一人が、そんなふうに言っている。も一人の人は、遠藤氏といって清子さんとは同姓であって、死ぬきわまで一緒に暮していた人だということを、誰だったか、ささやいていた。

雑誌『青鞜（せいとう）』や、その他の書籍がひろげられて、なき人の書いたものが載っているのを、人々は見廻した。しめやかではあるが、わやわやしたなかなので、気分も悪いわたしは、近間（ちかま）で話している、ほんの一つ二つの逸話しか耳に残らなかった。

「ごく若い時には日本髷（にほんがみ）がすきでね。それも、銀杏（いちょう）がえしに切（きれ）をかけたり、花櫛（はなぐし）がすきで、その姿で婦人記

者だというのだから、訪問されてびっくりする。」
「『二十世紀婦人』の記者でしたろう、その時分は。」
「たしか、東洋学生会の仲間で、印度人に、英語を教えていたでしょう。」

人々の眼には、ずっと若い時分の、遠藤清子さんが話されていた。わたしの眼には、それよりずっと後（あと）の、大正六、七年ごろ、もう最後に近いおりの、がくりと頬（ほお）のおちた、鶴見（つるみ）のわたしの家で会食したおりの、つかれはてた顔ばかりが浮んでいる。

荒木郁子さんが、清子さん母子の墓のことを気にかけていたのは、清子さんの死後託された男の子を、震

災のおり見失なって以来、十年にもなるがわからないから、その子も一緒に入れて建てたいという発願（ほつがん）だった。

郁子さんは、玉茗館（ぎょくめいかん）という旅館の娘だったので、清子さんの遺児はその遺志によって、『青鞜』同人たちから、郁子さんに依託することになった。そして、あの大正十二年の大震火災のおり、広い二階座敷にいたその子は、表階段（おもてばしご）の方へ逃げた。郁子さんは、裏階段（うらかいだん）へ逃（のが）れた。表階段（おもてばしご）の方へ駈（か）けていった後姿は見たが、それっきりで、どんなに探しても現われてこないのだった。その子は――民雄（たみお）は、岩野泡鳴（いわのほうめい）氏の遺児ではあっ

たが、当時の岩野夫人清子には実子ではないという事だった。父につかないで、清子さんの養子になり、離婚後も母と子として一緒にいた薄命な子だった。

泡鳴氏には、他（ほか）にも子供は沢山ある。清子さんより先妻のお子、清子さんより後（のち）の妻の子。だが、清子さんとの結婚が風がわりであるばかりか、その子になっている民雄も、また別の腹に生れている不幸（ふしあわせ）な子だ。

四十九歳で死んだ岩野泡鳴も、十九年間、わびしく墓表（ぼひょう）ばかりで、それも朽ち倒れかけた時、やはり荒木郁子さんの骨折りで、昨年、知友によって立派な墓石が建てられた。この人の半獣主義、刹那（せつな）哲学、新自由

主義は、文芸愛好者の、あまりにもよく知っていることだが、まだ知らぬ人のためにもと、昨年建てられた石碑の、碑文は、尤も簡単でよく述べられているから、それを記しておこう。

> 岩野泡鳴本名美衛、明治六年一月二十日淡路国洲本に生る。享年四十八歳、大正九年五月九日病死す。爾来墓石なきを悲み、友人相寄り此処にこの碑を建つ。泡鳴著作多く、詩歌に小説に、独自の異才を放つ。その感情の豊饒と、着想の奇抜は、時人を驚せり。その表現の率直なるは善良なる趣

味性を害（そこな）ふの感あるも、誰も泡鳴の天賦を疑ふものあるを聞かず、彼が文学的円熟期に入らずして死せるは、最も惜しむべきものとす。泡鳴初め浪漫主義を信じ、転じて表象主義に入り、再転して霊肉合致（がっち）より本能の重大を力説して刹那主義なる新語を鋳造せり。泡鳴は人生の神秘を意識し、その絶対的単純化に依（よ）る生活力の充実を期せるものなり、遂（つい）に彼は、その信念を進めて新日本主義となせり。思ふに泡鳴は、一時代先んじたるものにして、将（まさ）に来（きた）らんとする時代を暗示せり。

碑文はヨネ・ノグチ氏の撰である。（句点は仮に読

みやすいように筆者が入れた。）

死ぬること愚（おろか）なりといひて
　　高笑ひ君はまことに
　　　命惜しみき

泡鳴子をおもうと、蒲原有明（かんばらありあけ）氏の歌も刻されてある。

かくのごとき文人と、その最も、思想的にも人間的にも精悍（せいかん）であったであろう時期に、深い交渉をもったのが遠藤清子なのであった。

一方に泡鳴氏が、一風も二風もある、風変りの人であるのに、彼女もまた、一通りのものでない考えを、

恋愛と結婚についてもっていた。それがまた、潔癖すぎるほどに堅固に霊の結合をとなえ、精神的な融合から、性の問題にはいるべきだと、実に、きびしすぎるほど真面目（まじめ）に、彼女自身への貞操を守っているのだった。

　彼女は、泡鳴氏に結婚を申込まれる前に、五年間もある人を思っていて、そして失恋している。プラトニックラブにやぶれた彼女は、国府津（こうづ）の海に入水（じゅすい）したほど、「恋」に全霊的であり、彼女は事業も名誉も第二義的のもので、恋を生命としていたものは、それに破れれば現世に生きる意義を見出せないとまでいってい

る。そして、その最初の恋を、心の底にいつまでも宿していた。

彼女は、明治末期の、女性覚醒期に生れあわせて、彼女は大きな理想のもとに、それまでの女性とは異なる、生活方針を創造しようとした。我国において最初、覚醒運動を起した仲間の一人なので、彼女は彼女のゆく道を正しく歩もうと闘かったのだ。その理想主義者――泡鳴にいわせればローマン主義者の、愛の闘争は、破れたといっても決して敗北とはいわれまい。

そこへ忽然と現われたのが、半獣主義を標榜する泡鳴だったのだ。

明治四十二年十二月に、泡鳴は、突然面識もない彼女に、逢いに行って、二時間ばかりの間、率直に自分の半生の経歴を、告白的にあからさまに語りきかせた。清子はそのおりのことを日記では、泡鳴氏の素行には同感できなかったが、恬淡な性質には敬意を持つことが出来たと書いている。

その日はそれで帰ったが、五日ほどたつと、泡鳴は二度目の訪問をした。その日は清子の父親が来あわせていたので、

「明日、も一度会見したい。実は、重大な御相談があるのだが。」

と言って帰っていった。翌日は、ちゃんとやって来て、こんどは家庭の事情を告白した。

――妻とは名義だけであって、物質の補助をしてやるだけだから――

「三年以上も絶縁しているのだが、妻の同意がないので、正式の離婚が出来ないでいるだけだ。」

だから、気にかけないで清子に同棲してほしい、同時に結婚もしてくれと申込んだ。

午後二時ごろ、お昼飯をたべに、麻布の竜土軒へ行き、清子は井目をおいて、泡鳴と碁を二回かこんだが、二度とも清子が敗けた。そのあとを、二時間ばかり、

泡鳴が玉突きをするのを見物していたが、こうした友人づきあいが、すっかり打解けた気分にはいりこめたものと見えて、幽霊坂の上でわかれる時には、引っこしの話までまとまって、新らしく家を借りる金を十五円泡鳴は清子に渡した。

「愛のない結婚なんて、自身を辱しめることだし、男を欺く罪悪だ。」

と清子は結婚は拒絶したが、一家に同棲して見るのは承知した。

「無論、あなたの人格を尊重して――」

という約束をした。

この約束は、突飛（とっぴ）なようでもあるけれど、二度の告白で、泡鳴の正直さは、正直な彼女の心に触れたのでもあったろうが、だが、彼女は独りになると机の前で考えこんだ。愛は霊からはいったものでなければ本当でない、そして、正しい理智から出発したものでなければならないという、平常（へいぜい）からの持論が拒んだ。

――あたしは、あなたに友情以上はもてない。

そう書いて、預かったお金を封入してかえそうとするうちに泡鳴の方から手紙が来た。

勿論（もちろん）第一条件だけでも拒絶されるよりもよいが、第二条件もなるべく考え直して承諾してもらいたい――

そんな文面だった。

「あなたは、樗牛（ちょぎゅう）を愛読することから来たロマンチスト、僕があなたのロマンチストになるか、君が新自然主義になるか。」

泡鳴はそんなふうにもいったが、とも角（かく）共同生活にはいる話は、手っとりばやく纏（まと）まったのだった。

それまで、彼女は、五年間ばかりいた赤坂檜町（ひのきちょう）十番地の家を引き払うことにしたのだ。拾った猫で、よく馴（な）れているのがいたが、泡鳴が厭（きら）いだというので、近所へあずけてまで行くことにした。たしかに清子は、泡鳴に引かれたものであったには違いない。

その前年かに、泡鳴は小説「耽溺」を『新小説』に書いている。自然主義の波は澎湃として、田山花袋の「蒲団」が現れた時でもあった。

ここで、泡鳴と清子の、不思議な生活がはじまることを書こうとする前に、婦人解放の先駆、青鞜社の文学運動が、男の連中をも、かなり刺激したことを思出した。生田春月さんが、花世さんに求婚したのも、そんなふうな動機だった。

そしてまた、そのころは、自由劇場が、小山内さんによって提唱され、劇運動の炬火を押出した時でもあった。

偶然といえば、今、わたしが机にむかっているところは、赤坂檜町である。十番地は乃木坂（のぎざか）のちかく、わたしの住居（すまい）の裏の崖（がけ）の上になっている。いま、音楽家の原信子（はらのぶこ）の住んでいるところとの間になっている。あたしが、はじめに赤坂の家から遠藤清子のお墓にゆくところを書きだしたのも、ふと、その事を思ったからだ。しかも、泡鳴が清子を訪れたのは十二月の一日がはじめてで、十日にはもう大久保（おおくぼ）へ移転（ひっこ）している。

今日は、昭和となってから十二年、もっとも画期的な年の、南京（ナンキン）陥落をつげたその十二月であり、暦は廿二日だが――新劇運動の親、小山内 薫（かおる）氏のなくなっ

たのも、クリスマスの晩で、十年前のこの月廿五日の宵（よい）だった。そして、自由劇場再進出の計画が、市川左団次（いちかわさだんじ）によって実現されようとしている。

私は、霜白き暁を、多少の感傷をもって黙然（もくねん）としている。

二

テトテトと、暁の霜に冴（さ）えるラッパの響きに、眠りついたばかりの床（とこ）のなかで、清子はうっすら眼をさました。

歩兵一聯隊（れんたい）の起床ラッパを、赤坂檜町の旧居で聴いている錯覚をおこしていたが、近くで猫が、咽喉（のど）を鳴らしている気もした。

はっきりしない頭のどこかで、猫は近所へあずけて来たはずだがと、預けたとはいえ、空家（あきや）へ残して来た、黒と灰色との斑（まだら）の毛並が、老人（としより）のゴマシオ頭のように小汚（こぎた）ならしくなってしまっていた、老猫（おいねこ）のことがうかんだ。

――あれは、一（ひと）ツ木（ぎ）の縁日へいった時、米屋の横の、溝（どぶ）っぷちに捨てられていたのを拾ってやったのだが、また宿なしになってしまやしないかしら。

泡鳴氏が汚ながるし、厭(きら)いなので、捨てて来はしたが——

　と、そう思うと、引越しのとき、山のように積んだ荷車の、荷物の上へせっかく捨てた古柄杓(ふるひしゃく)を、泡鳴氏は拾って載せた——あんなことをしなければ好いのにと、見ないふりをして眼を反(そ)らしたが、冬の薄ら陽(び)が、かたむきかけたのを痩(や)せた背に受けて、古びしゃくを拾いあげて荷物の上にさしこんでいる、厭(いや)だった姿が、まぶたの上にはっきりとした。

「あ、赤坂の旧家(うち)じゃない。」

　パッチリと眼がさめると、猫だと思ったのは、隣室(となり)

から、男のいびきがきこえていたのだった。

ラッパの音は、戸山学校からきこえてくるのだった。大久保の新居に来ての朝夕、馴染(なじみ)のない場処(ところ)でありながら、赤坂に住んだ五年間と変らないのは、陸軍のラッパの、音をきくことだけだった。

――もう、やがて、二十日ぢかくにもなる――

目がさめさえすれば、妙にしょんぼりと、越して来た日のことが、目に浮ぶのが、この頃のならわしになっていて、十二月九日に泡鳴氏と、此処(ここ)に同棲(どうせい)しはじめてからのことが、またしても繰返して思いだされるのだった。荷物を出してから、二人して来たこの家に、

家主(やぬし)のところから提燈(ちょうちん)を借りて来て、二人は相対していた。冷々(ひえびえ)した夕闇(ゆうやみ)のなかで、提燈を抱(かか)えるようにして暖まったり、莨(タバコ)を吸ったりして荷物のくるのを待った。

お蕎麦(そば)で夕食をすませると、もう荷物も着くだろうと、家(うち)のなかを見廻して清子は言った。

「とにかく、同棲しても、まだ友人関係なのですから、あたしの寝間(ねま)は、此処を茶の間にして、そっちの六畳ときめますから。」

「では、僕は、八畳の方か。あすこ、客間だね。」

と泡鳴氏はいった。二人は寒い、なんにもまだ置いて

ない室に眼をやった——その寝間から、いびきは洩れてくるのだった。

「あんなに、泣いたり、怒ったりしても、よく寝られるものだ。」

清子は毎夜のように持ちあがる、二人の間の暗闘——許す、許さぬの絡みあいを思った。俺は腹を切るといって怒るかと思えば、これほど熱愛を捧げる誠意を酌まないのかと泣く男が、枕につくと、ぐっすりと寝てしまうのを、不眠症になってしまって、朝まで眠れない自分とを思いくらべた。

——けれど、だんだん私は岩野を好きになっている。

と思わないわけにはゆかない。けれど、恋愛の芽もまだ宿してはいないと、心で頭は横に強く振った。

そんなことを思う傍らで、まだ移転の日のつづきを思い出しているのだった。翌日に着いた泡鳴の荷物は、荷車に二台の書籍と、あとは夜着と、鉄の手焙りだけだった。

「僕は、なにしろ、蟹の缶詰で失敗したから、何にもない。洋服が一着あるのだけれど、移転の金が足りなかったから、質に入れてしまった。」

その費用の幾分でも、分担しようと、清子が銀時計を出すと、

「君の品（もの）なんぞ出さなくったって好（い）い。何しろ、樺太（からふと）で、蟹の缶詰で一儲（ひともう）けしようと思ったのだが――蟹はあるが、缶の方がうまくいかなかったんだ。」

彼はてれくさく、笑いながら言った。

――良（い）いところのある人だ――

清子は頰（ほお）をおさえた手に、頰骨がさわる気がした。

毎朝見る鏡に、眼ばかり大きくなってゆくのがわかるのだが、こう段々に、夜が苦しいものになって来ては堪（たま）らないし、眼のさめた瞬間の心さびしさも、朝々ごとに、たまらないものに思った。

腕力をもってくるなら、反抗する決心もあるが、

沁々(しみじみ)と訴えられるのは愁(つら)い。自分の思想を守るのに、そんなことで屈伏したり、陥落は出来ないとも思った。最初の「霊の恋」の対手(あいて)の男は、もう、すっかり醒(さ)めてしまっているのに、

「あなたは、泡鳴氏と、もう結婚したのですか。」

と、この同棲の新居へ訪(たず)ねて来て言った。

「どうとも、あなたの御想像にまかせます。」

と答えただけで、並んで月を見た。泡鳴もそれを見ていた。あとで嫌味(いやみ)をいったが、十月の冬の月は、皎々(しろじろ)と冴(さ)え渡っていた。

お互の胸は、月と我々との距離だけの隔りを持って

いると、その時はっきりそう思った。その男への執着でなく、霊の恋の記念のものだけが焼きすてかねて、再び見まい、手にも触れまいと、一包にくくって、行李(こうり)の底に押籠(おしこ)んでしまった。

――だから、言って見れば、泡鳴に、霊の恋が芽生(めば)えさえすれば好(い)いのだ――

けれど、それは、半獣主義を標榜する人に無理はわかっている。といって、それがそうならないからこそ、もろともに悩み呻吟(うめ)くのではないか――

彼女は、窓の外の、軒端(のきば)で笑っているような、雀(すずめ)の朝の声をきくまいとした。蒲団(ふとん)をひきかぶるようにし

て、外は、霜柱が鋭いことであろうと思った。なにもかもが、きびしすぎると感じながら、自分の主張は曲げられないと、キッシリと眼を閉じていた。見かけだけは仲の好い、新婚夫婦に見えて、霊肉合致の域にいたるまで、触れさせまいとする闘いに、互に心肉の鎬を削っている、妙な生活！

去年の今ごろ（明治四十一年）は、日本婦人の権利擁護のために、治安警察第五条解禁の運動に朝から晩まで駈け廻っていたものだが、今年は肉と霊との恋愛合戦に、血みどろの戦いだ！

彼女は、首を縮めて、ふとんをかぶると、大丸髷が

枕にひっかかった。

*

許す許さぬの解決はつかないままだが、日が立つにつけ、この同棲生活の厳寒も、いくらかゆるんで来た。いらいらした霜柱も解けかけて来た。杉の木の二、三本あった庭には、赤坂からもって来た、乙女椿（おとめつばき）や、紅梅や、海棠（かいどう）などが、咲いたり、蕾（つぼみ）が膨（ふく）らんだりした。清子の大好きな草花のさまざまな種類が、植えられたり種を播（ま）かれたりした。

「まあ、あなたが、そんな事して下さるようになったわね。」

と清子がいうように、泡鳴氏が土をいじっていることがある。文壇の交友たちの話をきくことも多くなって、清子も小説を書こうと思いたったりしはじめた。

一ツ石鹸箱（シャボンばこ）をもって、連立（つれだ）って洗湯（おゆ）にゆくことも、この二人にはめずらしくはなかった。男湯の方で、水野葉舟（ようしゅう）や戸川秋骨（しゅうこつ）氏と大声で話合っているのを、清子は女湯の浴槽（ゆぶね）につかってのどかにきいていることもあった。今日も、一足おくれて帰ってくると、家（うち）のなかで女の声がしていた。

「いま現金がないから、そのうち金のある時に返すといっているのに。肯（き）かないのか。」

と、言っていたが、

「さあ、これが証文だ。」

何か書いて渡している様子だった。帰してしまうと、六畳の部屋へ顔を差入れて、化粧をしている清子の鏡のなかへ、自分の顔をうつしこんだ泡鳴は、

「彼女（あれ）だよ、放浪（小説）のモデルの女は。缶詰事業のとき、彼女（あいつ）の着物も質に入れてしまったので、返してくれといって来たのだ。金がなければ、証文にしろといって、持っていった。」

清子は、今帰っていった女のことなどは、あんまり気にならなかった。鏡にむかって、鬢（びん）を掛きながら、

思いだしていたのは、いつぞや、此処へ来て間もなく、やっぱりお湯から帰ってくると、主客の問答を、襖越(ふすまご)しにきいた。

「まだか？」

「まだだ。」

その時の客は、正宗白鳥(まさむねはくちょう)氏だったのだ。泡鳴氏の友達の方には、もっと手厳しいのがあって、ハガキで、そんなことをしていて、清子に男が出来たらどうするとか、彼女は生理的不具者なので、よんどころなくそうしているのだろうなぞといってきているのもあるのだった。

清子には、そんなことはなんでもない非難だと思えた。それよりも辛抱のならない女客があることが厭（いや）だった。それは、泡鳴氏の先妻幸子（さちこ）だ。三年前から別居しているという彼女は、冷やかな調子で、

「私は、貰（もら）うものさえ貰えば好（い）いんですからね。どうせ、この夫（ひと）とは気が合わないんだから、この夫（ひと）はこの夫（ひと）で、勝手なことをなさるがいいんです。あなたとは、気があっているそうだから結構でさあね。」

永遠性を誓えない邪恋を押退（おしの）け純一無二のものでなければならないと、賤（いや）しむべき肉の恋をこばんで、苦しむ身に投げつける言葉のそれは、まだ忍耐（がまん）するとし

ても、名ばかりの夫妻とはいえ、夫が厳冬の夜（よ）も二時三時まで書いていることを、この女は知らないのだろうか、文学家の朝夕（ちょうせき）は、思ったより悲惨なものであるのに、その金を催促に来て、いう言葉がそれなのだ。――あの、賤しい女に、何（なん）で、わたしは見下げられるのだ――と、ふと、そのことを、いま、帰っていった、襖（ふすま）の向うの女の声から、連想を呼び出されていたところだったのだ。

「なにをぼんやりしているのさ。」

泡鳴氏は、はりあいなさそうにいった。

「ふん、これね、なんだか冷たい恋のようで、わたし

たちに似ているから。」

と、清子は心にもないことをいって、はぐらかして、生けてあった連翹（れんぎょう）の黄色い花を指さしたが、鏡の中に、陰気くさい、気むずかしい顔をしている自分を見出すと、彼女は、またしても家のなかの空気を暗くしてしまう自分を、どうしようもなくなって、気をかえに散歩にでも一緒に行こうと、立上ると、八畳の部屋を覗（のぞ）いた。すると、泡鳴氏は後むきになって横になっていた。清子はその背中から、悶々（もんもん）としている憂愁を見てとった。

＊

「僕はもう諦（あきら）める。僕にそういう心を起させるものを切りすてる。泣くには及ばない。」

せせぐり泣く枕許（まくらもと）で泡鳴はそういった。そんな事をさせてはならないと、二十八歳の処女は泣いたのだ。とはいえ、二ツの思想が同棲している以上、この争闘（あらそい）はくりかえされなければならない。

彼女は、どうかすると早起（はやおき）をして、台所に出たり、部屋の大掃除をしたり、菜漬（なづけ）をつけたりする。と思うと、戸山が原へ、銀のような色の月光を浴びにいったりする。「別れたる妻に送る手紙」という小説を書いた、近松秋江（ちかまつしゅうこう）氏に同情して、この人のロストラブの哀史を、

同情をもって読んでみようと思うといったりしていた。

　立場の違う苦しみに、互に、弄(なぶ)り殺しのような日をおくりながら、二人の相愛の気持ちは日々に深まっていったのだった。日記をつけるのにも、岩野氏とか、泡鳴氏とか書いたのが、「君」となったが、三月ばかりするうちに、主人(あるじ)という字になった。

「あの女(ひと)って、随分失礼な女(ひと)だ。不作法ったたってなんだって、教養のある婦人(ひと)だというのに、いつだって案内もなしで、いきなり上りこんでくるなんて我慢が出来ない。」

　彼女は先妻の幸子が、いつもの癖で、ずかずか上り

込んで来て、例（いつも）のくせで、朝、起きはぐれているところを、荒い足音で、わざと目をさまさせられたのを憤（いきどお）った。

中学教師をしていた時代の泡鳴と、女学校教師だった幸子とは、泡鳴が樺太（からふと）へ蟹の事業をはじめる前に別れたのだが、清子は友人同棲をはじめてからも、幸子に同情して、泡鳴に復帰するようにさえ勧めたこともある。米や炭を送って、幸子の生活をたすけもした。それなのに、何時（いつ）も来ると、自分が退（の）いてやっているのだぞといわないばかりの仕打ちに、清子は腹を立てた。

だが、そんな不愉快な日ばかりもなかったのは、若葉の道を蛇（じゃ）の目傘（めがさ）をさしかけて、連れ立って入湯（おゆ）にゆくような、気楽さも楽しんでいる。

――主人（あるじ）の体量、万年湯ではかったら、十四貫三百五十目（め）あったといって、よろこんでいらっしゃったと、日記につけたりしている。

暑い晩に、泡鳴は半裸体で原稿を書き、彼女は傍（かたわら）でルビを振っている。と、青蛙（あおがえる）が飛び込んで来た。泡鳴は団扇（うちわ）で追いまわし、清子も手伝った。灯（ひ）によって来た馬追虫（うまおい）もいる、こおろぎもいる、おけらもいるという騒ぎに、仔犬（こいぬ）もはしゃいで玄関から上ってくれ

ば、飼猫も出て来た。虫のとりあいをして、猫がこおろぎを食べると、犬がくやしがってワンワン吠えたてた。

「まるで動物園だ。」

と泡鳴が笑っているという図もあったりした。家庭生活にそこまで、犬も猫もきらいな泡鳴をひっぱりこみ、浸らせた清子の、一筋でない信念の強さがそれでも知れるが、それればかりではなかった。泡鳴は、そうした和やかな団欒には、勧進帳をうたったりなんかして、来あわした妹に、こんなことは兄さんはじめてだと、びっくりさせたりした。

——進んでノラともなれず、退いて半獣主義に同化することも出来ない。恋と思想と一致しない。私たちは常に絶えざる苦悶（くもん）と懊悩（おうのう）とを免かれない。しかも君に対する恋の執着はどうすることも出来なくなっている——

それは偽りのない彼女の告白だ。

泡鳴は、金が出来たら広い場処に移って、鍵（かぎ）のかかる部屋をつくってあげようといい、結婚式は立派にしようと、優しくいった。

けれど、けれど、清子の思想は主張は、強かった。四十三年の一年は、その相剋（そうこく）をつづけて、四十四年の

一月、熱海(あたみ)への三泊旅行も、以前の関係のままで押通した。

熱海の間歇(かんけつ)温泉ではないが、この、珍無類夫妻の間には、間歇的に例の無言の闘争が始まるのだった。そして、彼女は終日唖(おし)になり、泡鳴はいろいろの所作をした。

「泣いたり、怒鳴ったりするのは、まだ悲しみや怒りの極(きわ)みじゃない。悲痛の極(きょく)は沈黙だ。沈黙が最も深い悲痛だ。」

と、泡鳴は言った。

飽満(ほうまん)の後(のち)にくるたるみならば、まだ忍べるが、根本

の愛の要求に錯誤があるからだと、彼女は悩みになやみぬいた、その夜の夜明けに、いよいよ気分をかえて、新しく彼を愛してゆこうと決心した。
「理智の判断を捨ててしまって、盲目に恋に身を投げだそう。そうしたら泡鳴も満足し、自分の淋しさも消えるかもしれない。」
自分を没くなすことは、もっと大きな自分をつくるために必要かもしれないと、彼女は自分に言いきかせた。そして、それをするならば、それは今日だ、この覚悟が崩れないうちにと思った。
打明けるには、快い顔をしていたかった。気分を

軽くするために、晴れた日の下に出た。お友達の家（うち）で闘球をして遊んで、夕ぐれになって帰るとき、これならば、心から笑って話せると思った。新しい恋人の心持ちで話しあおうと急いだ。はずみきって玄関から上りながら、旦那さまおうちときいたら、婆（ばあ）やは、お出かけですと答えた。

清子の勢いこんだ覚悟は挫（くじ）けてしまった。

泡鳴氏も苛々（いらいら）して酒ばかり飲んだ。そして、

「私は不幸な男だ。あなたも不幸（ふしあわせ）だ。その上、貧乏はする。さぞ詰らないだろう。」

とつくづく言った。精神的にも、物質的にも、なんと

か打破しなければいけない。それには、生活をすっかり改(か)えるのに、限ると思ったためかどうか、『大阪新報』に入社することになった。後(あと)から清子も行くことになる前に、音楽家の北村氏夫妻が、新劇団体をつくるのに、女優にならないかと勧められて、清子の心は動いた。

「僕は自分の妻を、公衆(ひと)に見せるのは嫌(いや)だな。」

と泡鳴は反対した。それには、うんといわなかった清子も、稽古(けいこ)を見にいってくると、すっかり厭(いや)になって断ってしまった。

*

いよいよ泡鳴が大阪へ出立する二日前の、三月廿六日の日記には、

――私の心は黒い夜の森のような、重い空気につつまれている――

と清子は書いている。二人で饑えても離れて心配するよりいいというような泡鳴からの手紙を読むと、想思の人が東西を離れるようになるとは、ほんとに憂世ではあるといい、苦労をともにする人は、呼べど答えぬ百余里の彼方の難波の宿にいるといい、すこしばかりの金を手にすると、この金を旅費にして、大阪にゆこうかしら、会いたいのは私ばかりでもあるまいからと、

一緒にいれば、争闘（あらそい）つづける泡鳴を恋い慕った。蛙（かえる）の声が気のせいか、オオサカオオサカときこえるともいうようになっていた。

君帰り物語りすと見しは夢、ふとうたたねの
　春宵（しゅんしょう）の夢
君住むは西方（せいほう）百里飛鳥（とぶとり）の、翼うらやみ大空を見る

と、だらしがないほど彼女は恋しさを告白するようになった。

とうとう、婆やを連れて、大阪へ、家財道具そっくり持ってゆく日が来た。

＊

大阪郊外池田山の麓（ふもと）に家居（かきょ）した彼女は、汽車に乗っただけで、郊外から郊外へ移って来たほど気が軽かった。

青菜に靄（もや）のかかる宵は、青葉の匂いのはげしいころだった。おなじような郊外の住家（すみか）というが、二階から六甲山も眺められる池田での生活には、彼女はガラリと様子が一変してしまった。主人（あるじ）が、今朝（けさ）のお出かけには御機嫌がよかったのに、お帰りになってから悪い、私がお出むかえしなかったからだろうか、なんぞというようになった。だが、それは表面だけで、四十四年五月十一日の日記には、

――私は結婚生活に経験がない。始めて男性に心身を許してしまった今日、私の結婚生活に対する幻影は早くもさめてしまった。古人が結婚は恋愛の墓だといっている。私は、恋人の努力によって、内外一致した恋愛生活が、真の結婚生活だと信じていた。結婚を葬るのは、当事者の努力が足りないためだと思っていた。しかし、これは私一人のイリュージョンかもしれない――

と、何処やらに絶望を噛みながら、それでも、純一に夫を愛そうと、恋の自伝を書くために、行李の底へ押込めておいた、五年間もつづけたという霊の恋の、形

見の書簡を、陶器の火鉢をひっぱり出して燃してしまった。電燈が薄ぐらく曇る煙りのなかで、泡鳴を揺り起して見せると、

「妙なことをする人だ。急に何を思出したんだ、この夜更けに。」

と、もうそんな事には興味ももたなかった彼は、ともすると、

「なにも、いやいやいてもらいたくない。」

というようになった。

*

前号に、荒木郁子さんに養われて、震災の時に死ん

だ男の子を、清子の実子でないように書いたが、それは、あんまり諸方訊きあわせたための行きちがいであった。生田花世さんは、その頃、ペンネームを長曾部菊子といわれたが、芸術まず生活の実行からと、水野葉舟氏の家に女中奉公をされていた。仲のよかった岩野、水野の両家の交わりは、紫紺の釣金マントを着て、大丸髷の清子女史を伴なった泡鳴氏がお得意の面で、

「清子も、とうとう僕の子を、ここへ入れている。」

と、細君のお腹をさして、満足気にいってたのを見て知っているということだった。

釣鐘マントの流行は大正三、四年ごろだった。その時分に、この夫妻は大阪から帰って、東京巣鴨宮仲（すがもみやなか）に住んでいた。四年の夏のころ、清子の健康はすぐれていなかったことや、大正十二年に九歳位だというのにも合っている。しかも、泡鳴氏が清子さんに別れる時、

「もう、あなたとも、永久のお別れですね。」

といったとき、泡鳴氏はこういっている。

「おれはそうは思わない。いつ喧嘩（けんか）して帰って来るかも分らない。それに坊やは時々見にくるよ。」

泡鳴氏は、そのころ、筆記者に雇った蒲原房枝（かんばらふさえ）（後（のち）の夫人）と、不義の交わりがつづいていたのだった。

「蒲原とのことならば、もう一月も前から……が出来(でき)ていたのだが、私はあなたに対する尊敬は、今日でも持っている。」

とその関係を軽い調子で告白したのだった。

それは、清子にとって、重大なことだった。同棲して七年間、泡鳴の品行に一点の汚点もなくなったことは、清子の誇りでもあり、泡鳴の誇りでもあったのだ。多年の放縦(ほうしょう)生活を改めたという、家庭の美事光明(びじこうみょう)が、一瞬にひっくりかえってしまったのだ。

清子はその侮辱を、冷静に考え処理しなければならないと思ったが、昂奮(こうふん)した。謀反者(むほんしゃ)の間にいることが

たまらなかった。
　蒲原房枝は彼女にこういった。
「こんな関係になりましたからって、決して定まった月給よりほか頂こうとは思っていません。私は、お金をもらって囲われているようなことはしたくないのです。」
　それからの泡鳴は、いっそ知れてしまったのをよい事にして、夜ごとに公然と、蒲原のところへ出かけて行くようになった。
　千仭（せんじん）の底へつきおとされた気持ち——清子にとって、それよりもたまらないのは、そうなっても夫婦関係を

つづけようとすることだった。

別居か離別か、その二ツに惑った彼女は、青鞜社（せいとうしゃ）に平塚明子（はるこ）さんをたずねた。

別居する決心がついた。収入の三分の二を渡してもらって、子供を養い、妻としての権利をもつのを条件に、私製証書は二通つくられた。

あんまり事件（こと）が突然なので、誰も彼もびっくりしたが、岩野氏はあっさりと、荷物を積んだ車と一緒に、

「さようなら。」

といって出ていってしまった

白々（しらじら）しい寂寞（せきばく）！

彼女はこんなことをいったことがある。
「あたしは芝で生れて神田（かんだ）で育って、綾瀬（あやせ）（隅田川（すみだがわ）上流）の水郷（すいごう）に、父と住んでいたことがある。あたしの十二の時、桜のさかりに大火事に焼かれて、それで家（うち）は没落しはじめたのです。その時の、赤い赤い火事に、幼い心をうたれた紅さと、泡鳴氏が出ていった夏の日の――八月でしたが、あの真昼の、まっ白な空虚さは、心からも、眼からもわすれられない。」

*

その後の清子さんは、切花（きりばな）や、鉢植の西洋花を売る店をひらいた。

泡鳴氏からの物質は約束通り届けられなかったものと見えた。後には、店の面倒をよく見てくれたり、深切にしてくれた青年と結婚した。大正九年に、その人との中に女の子が生れたので、夫の郷里京都へ、もろもろの問題を解決に旅立ったが、持病の胆石が悪化して、京都帝大病院で亡（なくな）った。

暮の押迫った時分だった。『青鞜』はもうなくなったが、新婦人協会の仕事で、平塚さんは東京が離れられなかった。ありったけの手許の金を送ってやると、

「まあ、あの人も、仕事のことで、いま、お金がなくって困っているだろうに、送ってくれるなんて、少しで

も、これは実に尊いお金だ。」
と、悦んだが、その時分には死を充分覚悟していて、泡鳴氏との遺児を、友達に頼みたいということを、遺言の第一に書いた。

悲しい結びつきであった。泡鳴氏にしても、大正四年四月、「新体詩作法」と、「新体詩史」を合したものを提出して、博士論文を要求していたのだが、審議に上(のぼ)っていた時に、清子さんと蒲原房枝とをめぐる事件の、世評がやかましくなったので、殆(ほとん)ど通過する間際(まぎわ)になって否定されたということだ。

廿八歳まで、霊肉一致の、恋愛至上主義に生きぬこ

うとした意志の強い女性の、ほんとにこれは、断片を語るにすぎないが、彼女が、泡鳴氏との同居に、頑固(かたくな)なほど身を守っていた明治四十三年は、幸徳(こうとく)事件があったりした時だった。

底本：「新編　近代美人伝（下）」岩波文庫、岩波書店
１９８５（昭和60）年12月16日第１刷発行
１９９３（平成５）年８月18日第４刷発行
底本の親本：「婦人公論」
１９３８（昭和13）年２～３月
初出：「婦人公論」
１９３８（昭和13）年２～３月
入力：門田裕志
校正：川山隆
２００７年９月５日作成
青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。